

ガートルード・ブランク、ルビン・ブランク 著/馬場謙一 監訳、
篠原道夫、岡元彩子 訳

自我心理学の理論と臨床

構造、表象、対象関係

堀川聡司

米国の精神分析家であり、優れた教育者として知られているブランク夫妻による教科書的著書が翻訳出版された。題名の通り、自我心理学の理論(第一部)と技法(第二部)が包括的に学べる内容となっている。

読者の中には、精神分析の著作、それも1994年に刊行された著作(第一版は1974年)が訳されたことについて、「なぜいまどき?」と疑問に思う方もいるかもしれない。いうまでもなく今日の精神医学は、精神生理学・精神薬理学が中心であり、20世紀中盤に全盛期を迎えた精神分析とは、病理理解も治療法も根本的に異なる。さらに精神分析は、良く言えば「古典」、悪く言えば「精神医学の発展を遅らせた障害物」と見なされることさえある。

しかしながら、本書はそうした理由で価値が失われる類のものではない。それどころか本書が提示する発達心理学的な視座は、今日の精神医学を豊かにする土壌を提供し得ると思われる。少なくとも、人のここには不可思議な領域があると考えた臨床家にとっては、何らかの補完的な手がかりを生み出すだろう。本評では、これからの精神医療を見据えた上での本書の特長を記してみたいと思う。

本書の第一部は、自我心理学の王道を見事にまとめた理論的な総説である。内容的には、米国精神分析の古典～全盛期の範囲にとどまるが(近年興隆している英国の対象関係論や米国の関係論・間主観性論などに関する記述はない)、この時期に精神分析は、精神医学や神経心理学、発達心理学に最も接近したと言われている。本書に今日的意義が認められる理由はここにもある。

自らの立場を「精神分析的発達心理学」とも銘打っているように、著者らは、人が乳幼児から成人に至るまでの精神発達のありようを想定する。そしてさ

まざまな精神疾患や心理的困難をその発達過程のどこかの段階における何らかの失敗として捉える(それは第13章にて「発達の支点」の観念から体系化される)。こうした力動的視座は、DSMやICDなどの操作的診断のアプローチとも相性は悪くなく、十分に併用可能なものである。患者が主訴として挙げる苦しみは、得てして生物学的に説明される(べき)部分と、その患者の生育史やパーソナリティに起因する精神的な部分が混ざり合っているが、後者を明確化する上でとりわけ役に立つだろう。たとえば、自我機能、退行の程度、対人関係の特徴、不安の水準などなど。

本書の第二部は、精神分析や心理療法を実践するための技法論が書かれている。これらがごく一部の力動派臨床家だけのものと考えるのはもったいない。著者らによる心理療法開始時の工夫や終結にまつわる考察は、精神科治療全般において有効と思われる。たとえば、患者本人の抵抗にぶつかったり、家族の協力が得られないことや、一定の作業を終えて別れる際に双方に複雑な事態が発生することは日常茶飯事である。それらの臨床的現象に対するヒントが散りばめられているのである。

本書が翻訳されたのは、過去の遺物と目されかねないものを、今日の精神科医療に生きる知恵の宝庫として世に発信する使命があつてのことだったと想像する。神経学、生理学、薬理学など、力動的観点からは一見縁遠い立場に立つ臨床医にこそ、この訳書を手にとって頂きたいと願っている。

(目白大学心理カウンセリングセンター)

●A5 352頁 2017年7月 定価:本体6,200円+税 金剛出版刊